

2024年9月1日 説教「ローマへの船出」

使徒の働き 27章1～12節

カイザリヤの地でアグリッパ王の前で立証したパウロは、王にキリストを信ずる勧めをしました。それに対して答えをださなかったアグリッパも、パウロには重罪の刑はないことを認めました。



1. 天 (1～4節)

①イタリアへ行くことが (1) 「さて、私たちが船でイタリアへ行くことが決まったとき、パウロと、ほかの数人の囚人は、ユリアスという親衛隊の百人隊長に引き渡された。」

パウロに最後まで同行しようとした、ルカを含む「私たち」はイタリアに船で向かうことになりました。ユリアスという百人隊長に引き渡されたのはパウロと数人の囚人たちでした。

②船に乗り込み (2) 「私たちは、アジアの沿岸の各地に寄港して行くアドラミテオの船に乗り込んで出帆した。テサロニケのマケドニヤ人アリストアルコも同行した。」

船はカイザリヤを出て、アジアの港に寄りながら行く予定でした。その船は小アジアの西北にあったアドラミテオの地のもので、テサロニケのマケドニヤ人アリストアルコも同行しました。

③シドン入港と出帆 (3～4) 「翌日、シドンに入港した。ユリアスはパウロを親切に取り扱い、友人たちのところへ行って、もてなしを受けることを許した。そこから出帆したが、向かい風なので、キプロスの島陰を航行した。」

船はカイザリヤから 150 キロほど北にあるシドンに入港。百人隊長ユリアスはパウロがローマ市民として上訴したからか同情的で、ルカなどの友人のもてなしを受けて過ごすことを許しました。船はシドンを出帆した後、向かい風であることから、キプロス島の北側を航行しました。

2. ア (5～8節)

①アレキサンドリヤの船に (5～6) 「そしてキリキヤとパンフリヤの沖を航行して、ルキヤのミラに入港した。そこに、イタリアに行くアレキサンドリヤの船があったので、百人隊長は私たちをそれに乗り込ませた。」

船はキリキヤ州とパンフリヤ州の沖を航行。ルキヤ州のミラに入港しました。ミラ港にはアフリカ北部のアレキサンドリヤを出てイタリアに行く船があり、百人隊長はパウロ及び友人たちはそちらに乗船させました。

②船の進みは遅く (7) 「幾日かの間、船の進みはおそく、ようやくのことでクニドの沖に着いたが、風のためにそれ以上進むことができず、サルモネ沖のクレテの島陰を航行し、」

ミラ港を出た船は、やはり向かい風で、進みは遅く、やっとのことでクニドの沖に着いたものの、風のために進むことはできず、南側に舵を取

り、クレテ島の東端のサルモネ岬に向かい、そこを迂回してクレテの島陰を航行することになりました。

③良い港に到着 (8)「その岸に沿って進みながら、ようやく、良い港と呼ばれる所に着いた。その近くにラサヤの町があった。

クレテ島の南側の岸に沿って進んだ船は、北西風を受けながらも、ようやくにしてクレテ島南の真中ほどにある湾に到達しました。そこには良い港と呼ばれる所がありました。そして、近くにはラサヤという町があって、落ち着いたのです。

3. ア (9～12節)

①航海は危険 (9)「かなりの日数が経過しており、断食の季節もすでに過ぎていたため、もう航海は危険であったので、パウロは人々に注意して、」

向かい風から船が遅れたことから、日数が過ぎていました。すでに冬が始まる前にイタリアに着くことははっきりしていました。また、航海は9月14日頃からは危険でした。ここには断食の季節も既に過ぎていたとありますが、それは贖罪日のことで、毎年9月の終わりから10月にかけて守られていました。つまり、航海が危険な期間に入っていたのです。パウロは専門家ではありませんが、宣教上に船を使うことも多く、難船した経験が3度もありました(Ⅱコリント11:25)。

②危害と損失が (10)「『皆さん。この航海では、きっと、積荷や船体だけではなく、私たちの生命にも、危害と大きな損失が及ぶと、私は考えます。』と言った。」

そんなことから、パウロなりの意見を述べたのです。つまり、このまま航海へと入るならば、積荷、船体の損失はもとより、乗員の生命までが危険となりますので、冬の間は良い港に留まっているべきだと勧告したのです。

③百人隊長の判断 (11～12)「しかし百人隊長は、パウロのことばよりも、航海士や船長のほうを信用した。また、この港が冬を過ごすのに適していなかったため、大多数の者の意見は、ここを出帆して、できれば何とかして、南西と北西とに面しているクレテの港ピニクスまで行って、そこで冬をすごしたいということになった。」

しかし、百人隊長は航海士や船長の意見を信用しました。ある面では当然のことです。しかし、ここには船長とありますが、「船主の商人は通例、自分の船の船長として振舞っていた」(ブルース)のです。船主からすれば、請け負っている穀物を早く届けたい面もありました。また、「良い港」はそれなりに良い地でしたが、冬を過ごすためには、半分ほどが外海に空いていました。クレテ島の西側にあるピニクスの方がより快適に過ごせるということから、多くの者たちが出帆することを望んだのです。これらのことを受けて、船長は出帆の決断をすることになります。

《結論》

今朝の聖書箇所では、パウロはいよいよイタリア(ローマ)に向けて、船出することになります。使徒 23:11 で、主はパウロに次のように語られていました。「勇気を出しなさい。あなたは、エルサレムでわたしのことをあかしたように、ローマでもあかしをしなければならぬ」。ローマ行きについては、ここに至るまで様々な経緯があり、もはや実現しないのではと思われる事態もありました。しかし、主の御言葉は真実で、それは着々と実現しようとしていたのです。

しかし、船に乗ったものの、旅は簡単ではありませんでした。カイザリヤからシドンを経て小アジアの東とキプロス島の間を通過して進むとしますが、向かい風でなかなか進みません。ルキヤ州のミラを経て進むと、逆風は続き、船は南へと向かいました。結果、クレテ島の東側から、島沿いに進み良い港に辿りつきました。ここは滞在場所としては悪い所ではなかったのですが、冬の期間を過ごすとなるとベストではないともいえました。しかし、時は航行禁止の期間に入っていました。商売上の理由もあってか船長は進行してピニクスで冬を過ごすことを提言。多くの者たちもそれに賛同しました。

ここで、パウロは『皆さん。今ここで航行を続けるとするならば、きっと大きな損失や危害がもたらされることとなります』と叫んだのです。彼は船のことについては素人です。しかし、三回の伝道旅行などから、地中海の気候や船旅については、経験が豊富で難船の経験もありました。そんなことから、このような発言をしたのでしょう。

この場面においては、パウロが主から御言葉に導かれたといった記述はありません。その面においては、私共が日常生活と共通していて、学びやすいのではと思われます。

それでは、パウロはただ単に経験や知識から判断して、直感的にこのような発言をしたのでしょうか。そもそも彼には「神は、この世の知恵を愚かなものにされた」(Ⅰコリ 1:20)という考えを持っています。知識や知恵は持っていましたが、ギリシャ人のようにそれらに頼るというメンタリティーは持っていませんでした。彼が求めたのは「隠された奥義としての神の知恵」(Ⅰコリ 2:7)でした。

それでは、その知恵を彼はいかにして得たのでしょうか。「目が見たことのないもの、耳が聞いたことがないもの、人の心に浮かんだことのないもの」(Ⅰコリ 2:9)は「御霊によって私たちに啓示されたのです」(Ⅰコリ 2:10)と述べています。とすれば、表には出ていませんが、彼が良い港に留まることを訴えたのは、主からの促しによったと考えられます。パウロは祈りのうちに、道を示されていたのです。だからこそ、船長をはじめ大方の人々が出帆を訴えるなかでも、留まることを主張できたのです。

私たちもパウロと似たような場面に遭遇することがあるでしょう。その時に、「臆病からではなく、力と愛と慎み」(Ⅱテモテ1:7)をもって進むには、主なる神との交わりを経なければ、とても現実の流れに抗うことなど、できません。仕事であれ、個人のことであれ、何らかの方向を迫られたときに、私たちがなすべきことは、主なる神を呼ぶこと(エレミヤ 33:3)です。